



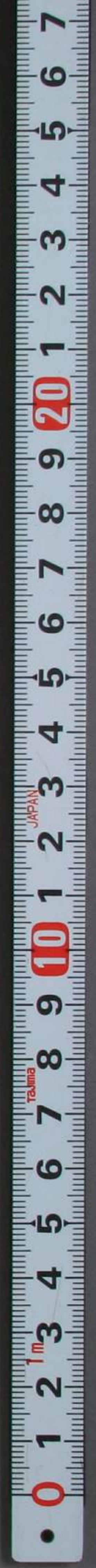
東國名所圖會

鹿嶋記

上

東國名所圖會  
鹿嶋記

ル 4  
3726  
1





明  
凡  
3726  
卷

鹿島志序

余夙好山澤遊獨素 室有制限且

迹取及子過二甚熱海數變身 每繙

山經地志未嘗不嘆噲而翔聖也鹿島

至視平時鄰取甚鹿嶋志既上特示

余請了云余嘗謂鹿島之神為上古

本間文庫

早稻田大學  
和 25.7.5  
購 入 券



佐命功臣以承

國初以來

天朝尊崇祀典虔敬載在國史迨後

鐘倉幕府展教彌爾歷呈利穡豐

諸氏多祀不懈蓋神去之造草昧

三世仗旄鉞而上輔

皇化導 鑾旂而建功邊陲也其威

靈亦被神臨彼鎮軍有歷世之紀

述也方今寓居所授猶有素志

此祠則不遠茲祀題銘僅之亦冊豈

不一闕典耶 時鄰世家奉祀性敏好

學結髮珠江戶師事松屋高田氏



高田氏於國學稱精博時鄰親  
有年今此書之成抑有淵源也其  
象與故事祠宇沿革風土名勝悉  
諸古史搜法遺書網羅不遺而又  
新可謂因備矣今朝有地志編集  
之舉則安以此書不給引証之用哉然

則至取輟匪聊少也余他日幸得  
田程未善備則將以此書為鄉導而  
其神祠採名名勝矣於是乎神  
祀焉不獨予刻其端以一言也

文政癸未季秋侍講成島司直撰

男讓書



鹿島志序

鹿島神官北條時鄰懷麻  
鳴志來而請之序余閱之  
其體裁大類於稱諸國名  
所畷會者僅足為兒女子  
之觀身時鄰者吾黨之豪



士如此一著書冰其本意  
蓋里老之懇請難辭而化  
也明矣雖法考證精覈使  
世俗能知神宮之由來善  
報土地之舊蹟廣布於天  
下永傳於無窮之功最可

謂忠於所祭之神矣夫倭  
學之道大而無不兼備神  
佛儒老衆流百家則此意  
地考終之書久豈可不謂  
其一端乎余竊喜忠於古  
所祭之神功於其所學之















高房神社  
熊野神社  
稻荷神社  
七夕神社  
跡宮  
海邊神社  
押手神社  
國主神社  
道路衢神  
卒川神社  
御笠神社  
歲山祭  
甲社

牛頭天王  
御厨神社  
八龍神  
潮神社  
鷺神社  
祝詞神社  
赤いそまの神社  
牟神社  
阿津神社  
手子崎神社  
御兒神社  
青馬祭  
御戸開

下巻 目錄

常陸帶祭  
司召祭  
流鏑馬  
御軍祭  
新嘗祭  
日月祭  
劍坐祭  
直會  
鉾場  
御田植  
三韓退治  
鬼逐

踏歌祭  
北星祭  
名越抜  
御船祭  
相撲  
黒酒白酒祭  
庭上御供  
神舞  
霞零鹿島  
要石  
高間原  
高間浦

鹿島志



水無川

鹿嶋崎

甕山

神池

鹿嶋故城

加久良井岡

潮来村

大洗磯前神社

鹿嶋小差繩

鹿嶋立

驛路鈴

ト部家

下津濱

神代壺

若松浦

布太郎久池

加藤須十二橋

御石祭  
天兼若木

碁石濱

角折濱

大織冠鎌足社

芹野橋

浪逆海

可多為橋

神領

神當流

神作鞍鎧

鹿嶋躍

大宮司

物忌

鹿嶋連

龜ト

拾遺

祢宜祝の沙汰  
祭頭

神樂

狛犬

校倉

車觸

経石

七不思議

矢の根石

世牟解牟塚

青屋

鹿嶋志

神宮寺  
寺院放逐

不問殿

樓門四王

文庫

赤童子

弥勒謠

七井戸

洲濱の菓子

白鳥郷



凡例

鹿嶋神宮といふもろの大宮所を記せるものより更に世に聞え  
 ぬ此書かん礎とすきたより一されば曆史ある雜書ある家々  
 の記録あるる翁の口傳などよりまぜてかゝる集一何とあまこの巻のた  
 りよれど、さういふと長々一けき見かたりんとす、其大概をこゝ  
 畧に略く二巻とす。

上巻は大神の縁起より撰社末社祭礼の式等下巻は名所舊蹟昔  
 より傳りたる古實をのち雜事神宮寺院のことまで記しつゝ、神宮は  
 ありつゝ、ね處す、郡中ありて近く名あり、とす、ちやうち、陰  
 録せし。

文中たる風土記とのと舉ぐる常陸風土記をゆく、旧記と列するは彼の  
 家よりつくる古文書の類より、例傳記の大宮司家の傳書より何れの



神事と書せし書あり。  
 文中引用の書悉く全文を引出し例の畧し何の書よと云ふ  
 かげつありといふ本書より悉く辨へし書あり。  
 古書よといふは古老の口碑の傳へし書といふのせし書あり  
 されば人の残るもあはれを中の人々の考あるがごとく人の  
 説をあげ又かのみが思ひつれりい僻埤ともうたふなり。  
 此書のかれ體と通俗の讀安きなりは物として人々の乞ふ  
 ことごとく名所圖會といふものなり。

鹿嶋志上の巻

神官小倭仗平時鄰撰

○神系 正殿武甕槌大神古事記也。於是伊邪那岐命按所  
 佩之十拳劔斬其子迦具土神之頸。著御刀本血亦走就湯  
 津石村所成神名甕速日神次。通速日神次建御雷之男神  
 亦名建布都神亦名豊布都神。とあり。日本紀よ武甕  
 槌命と經津主命を別神とす。たゞ其甚異なる傳あり一體分  
 身あり。おとひといふこと正に此ゆゑよ。古事記傳より此  
 證を擧ぐ悉く論じたるが如し。御名の義を紀は甕槌と書  
 るも借字にて。いふに通音嚴し。此の津は助字。ち  
 持の略言。建く嚴きといふかひと持するも稱名なり。と  
 大神の生するもいふこと天書より。も。色。姓氏録は倭川原忌



寸ら武甕槌神十五世孫彦根命之後也。また矢作連ら  
布都努志乃命之後也。とあり。

○

勲功 懸巻もかゝる皇孫日子番能通々藝命天降多へる  
時豊葦原水穗國と千速振荒振國神多かれは平定て  
むくく。高皇産靈尊天照大御神の勅りて思兼神八百万神  
等議と擇天菩比神と遣されし。大國主神は婿附く三年  
に。また復奏さど。よて又天若日子を降し。はるまはれも悪  
心あり。大國主神の女下照姫と娶。此國を獲んと慮く八年  
みな。また復命さうさど。天照大御神詔く何神と遣はさむ  
や。言趣せん諸神等白く。ゆくと建御雷男神と遣べし。  
く。則建御雷命は天鳥船神と副く天降し。はるまはれ。二  
神出雲國伊那佐小濱に降到く。十掬飯を浪穂に逆しと

し。其前は跌坐あり。靈異なり。御稜威を。天  
津神の詔と述多くと大國主神か。こみく八十掬手は隱侍ひ。  
言代主神と船と踏く。天逆手を青柴垣に成く。隱  
ま。建御名方神の力競とんと。来く。建御雷命の御  
手と取と立水。取成ま。又よと。せ。懼く退き。  
建御雷命と建御名方神の手と取。若葦と搯批。ごと  
投離る。逃去た。信濃國諏訪湖ま。追退け。星神香  
香背男と建彙槌命と遣く。帰服し。御言。背  
如螢火光。如五月蠅荒振神と拂ひ。石根木根立青水  
沫草の片乗も言止く。大八嶋の國中悉平和。皇孫尊と女  
ら。天降し。おもむ。古事記。日本紀。古語拾遺。出雲國  
造神賀詞。明りあり。神武天皇大和國へ御發向の。りも。

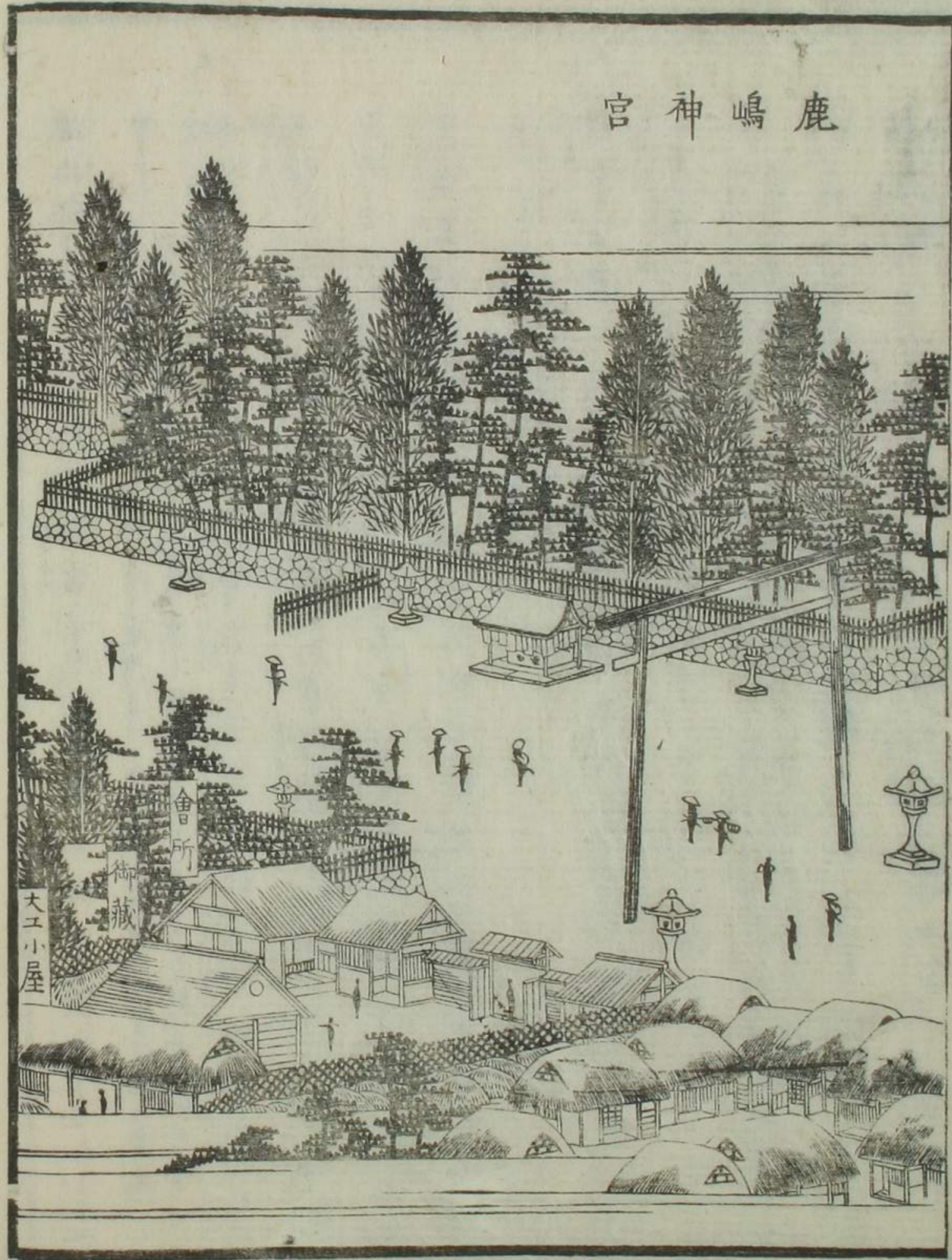








鹿嶋神宮





鹿嶋志



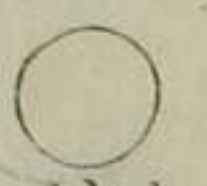
鹿嶋志



其弊少りしを以て正殿のわら破り隨て修理せしむるに  
 日本紀畧より延喜式より常陸國鹿島神社正殿二十年  
 一度改造其料使用神稅如無神稅即元正稅云東鑑より建  
 又四年源賴朝卿より御ひごりり造管のむあり中昔より  
 の國司の修理とてこころありて新任國司必宮と造り前司造  
 所より新司改任の時懷棄しは明月記文曆二年園太曆文  
 和二年春日權現驗記のと合せ見く知べし三代實錄より貞  
 觀八年正月鹿嶋大神宮惣六箇院二十年間一加修造所  
 用材木五万餘枝工夫十六万九千餘人新稻十八万二千  
 餘束云云あれ昔の宮造のさゆあり又同條より造宮材木多し粟  
 木を用ふるに宮邊の開地は五千七百株栽られしとて今  
 に栗林村あり中臣系圖より造鹿島宮使六位兼善造鹿嶋神

宮使從六位上時來などいふるに何れの御代のとありけん  
 其後慶長十年に至りては  
 かくも改免

造らせり御遷宮の作法なこれのありとあり別りし  
 べし宮の北向を多し御神體の東に向ひおとす深き  
 なるありとあり



神位 續日本紀より寶龜八年七月乙丑叙鹿島社正三位  
 續日本後紀より承和三年五月丁未奉授常陸國鹿島郡  
 從二位勳一等建御賀豆智命正二位云云同六年十月丁丑  
 奉授常陸國鹿嶋郡正二位勳一等建御加都智命從一位  
 云云透し正一位に進ませり  
 統紀より延暦元年鹿島神に勳五等封二戸  
 と授られし陸奥より鹿島神に神封あり  
 神の位階と尊卑と分つたありとあり  
 開田耕筆より是れ正五



位ありけり十二町正四位なり是の二十四町の田を奉らるる  
 次房の令の定の下に有名無實より稲荷といふを必正一  
 位を社家より免許せむたぐひよあはれ云云按は聖武天皇  
 八幡大神を東大寺より祭す一品を授られ是神位乃  
 始あり勲一等勲二等あり武臣武功より依り給たり  
 位あり神も武神軍の祈り靈験あり時勲位を授奉る  
 とあり古事記傳より鹿島の正三位香取を正四位上なり是  
 本一神あり鹿島の其總の御霊を祭る故は位も高  
 く香取より別より齋主の御霊を祭る故は位もや降  
 れるべし然る若是別神ありと云書記の趣経津主の  
 大將軍武甕槌の副將軍のどあり彼神位の尊卑は當  
 らざるもれとや云文德實錄より仁壽元年正月庚子詔天下

諸神不論有位無位叙正六位上と云々あり  
 一あり例傳記より鳥居は正一位勲一等の額を懸  
 け雷雨とびくき其額引割あり神託ありといふ  
 位階と額と懸んやと声よこし鳴動しけりといふ  
 ○宮所沿革 撰集抄より治承の比常陸國鹿島明神は参り  
 侍れむ御社を南向はけり前の海後と山より侍り社のい  
 ると田廊軒ときり塩とせむ御前の端板より海  
 なる塩と引を砂り二三里あり云と記せれど今  
 ゆもと思ひありと云々西行法師は國々  
 を行めて實景と云々人なれば偽りといふ  
 一書と云々のおやえ違ひはやあらん宮も昔は二十二年  
 一度づ改め造らる其時より所なるのりといふこと



難し諸國里人談よ撰集抄は鹿島のよらゝ息栖の風景へ  
息栖を鹿島の旧地やうらうらとゆへりぐれど風土記に神宮の地  
理をのりて所り地體高敞東西臨海峰谷犬牙邑里交錯山  
木野艸自屏内庭之藩籬潤流崖泉□涌朝夕之汲流嶺頭  
横舍松竹衛於垣外谿腰堀井葎蘿蔭於壁上春經其村者  
百艸□花秋遇其路者千樹錦葉可謂神仙之絶居佳麗之  
豊不可悲記とありて今の處り合へり

○神寶 師靈劍楯板龍神の形を画 旗棹 廣矛 鬼首篋鬼の頭を納む  
子何やん物あり 于珠滿珠かみまきあり 其の外古刀古劍甲冑弓矢鞍  
鏡合とまゝ々々武具馬具樂器の類のりも時代まゝとぬら  
き物數多ありてくく、舉盡一づて、毎年七月七日寶倉を  
開きまゝりて虫干の神事あり此日正殿に素麩と供奉りて

志よ桑の葉と茄子を用ふ風土記は崇神天皇の御世太刀  
十口、鉾二枚、鐵弓二張、鐵箭一具、許呂四口、放鐵一連、練鐵一  
連、馬一匹、鞍一具、八咫鏡二面、五色絶一連、奉幣せり

○師靈劍

師靈劍 古事記に、僕雖不降、專有平其國之横刀可降此  
者坐石上神宮也云、神武紀は、師靈此云赴屠能添哆磨云、  
神皇正統記は、此劍を豊布都神と号し、初の石上よまじ  
後よ常陸の鹿島の神宮よまじ、石上の神社は、和  
古事記傳よ、師字廣韻玉篇に、断声と注せ、意を以て  
用ひれ、今の世れ言りも物の残り、清く断



れ離る貌を布都と云つ。布都理といふ衣衣は然るに此釵の利て物を清く断離つ意を以称へ御名あり云。又佐士布都の佐士の義も未思得むと云。按は佐士の刺通の義もて釵のりよひと云。御名りや。

○神馬 崇神天皇の御世神馬を奉られしは風土記に云

東鑑に建久二年十二月廿二日子尅常陸國鹿島社鳴動如

大地震聞者驚身是為兵革并大莽兆之由祢宜中臣廣親

所註申也幕下有御謹慎則以鹿嶋六郎被奉神馬云云此

諸家より祈願の事云。神馬寄進ありければ此状

あまの納めしるも神馬を捧。こゝに神社啓蒙。此

蓋奉贄之義也。不能引進神馬者畫之献也云。按は神馬の

換は繪馬を献。も。れ。て。本朝文粹朝野群載など

漫筆かどしも繪馬の事あり。い色紙繪馬三尺云。又法華驗記今昔物語宣胤卿記草廬

○杉の神木 宮の後より神さび。嚴の鉾杉なり。谷川

氏契沖阿闍梨との説。杉は直木の義と云。本居

氏と云。進木あり。木の木か。へらとび。と。上へ

も。みの。木。な。り。直木と云。い。直とす。こ

り。古。い。あ。む。こ。此木の生立直と云。正直

の表物なれ。神木と云。されば日本紀。石上振之神

掲。万葉集。三諸神乃神杉。す。神之祝。我鎮齋杉原など

と云。木朝俗諺志。和訓栞。常陸國大田社造営の時

杉の神材の中は鹿島大明神の文字あり。左右甚分明なり。

よ。一。鹿嶋は納免。一。當社は納む云。大田の社。大田の里。一。許北。里宮と云。あり。



中。薩都  
神社あり

○御藤 瑞垣のやとらよ生さるえとてひらるでれ。花盛の比を  
ひら立とてひらるえとてひらるでれ。

詞林采葉抄より凡我國に藤

根國と申とらや。是則鹿島明神金輪際より生出さる御坐石  
を柱とて藤の根とて日本國をつるにありて申故なり云々。  
○鹿を神使とて古事記より葦原中國平和巨神と擇ま  
りて天尾羽張神と大神の天安河の水を逆は塞上とて道  
を塞むとてよせむ。他神の行はるやとて天迦久神を遣

し問に免あひて武甕槌大神をまねてせまけり。とあり  
平田氏の説よこれ天迦久神と天鹿神とてあまを大神の鹿  
を使とて起原なりとて。羅山文集より常陸國鹿島宮古  
来不殺鹿以神使故也云々。とて。如く今よありてかく鹿を  
使とて起原なりとて。神の使者とて。古くよりいひ  
傳へ諸社あり。古事記より倭建命伊吹山より分入る。時  
白猪をえりて神の使者なりとて。松浦廟宮縁  
起大平記神社啓蒙より。神使のこころ。其外物より。おや  
か。世よひらる。熊野山の烏稻荷山の狹比叡山の猿  
八幡社の鳩松尾社の龜熱田社の鷺。變宕山の鷲富  
士山の猪。三峯社の狼。大國社の鼠。三島社の鰻。諏方社の  
蛇。荒神の鶏。などのたひなり。



○宮社の差別 延喜式神名帳に大小の神祇を記す神社とのみ  
 書ふあり伊勢を除くのみ鹿島香取のみ大分りて鹿島神  
 宮香取神宮各神大月と加きり他神は異ある大神はありまこと  
 故と思ふなり三代實録貞觀九年八月二日勅伊勢國伊  
 佐奈岐伊佐奈弥神改社称宮云云北條九代記蒙古襲来の  
 条は伊勢の風社を風宮と崇らる云云などありて宮と社と  
 尊卑の差等あることありて後世となりて宮も社もおなじ  
 此れとの心得あり誤りありて宮の御屋社を屋代り  
 義ありべし

○靈験 古悪神を征伐ありて御劔と逆は立く其上は御  
 坐し又御手を劔又より成りなど奇き御稜威を示し  
 ありて古事記より東鑑壽永三年正月社僧夢想より

當所神為追討義仲並平家赴京都御云云而同は日戌社黒  
 雲覆寶殿四方悉如向暗御殿大震動鹿鷄等多以群集頃  
 而彼黒雲且西方雞一羽在其雲中見人目是希代未聞奇  
 瑞也者武衛令聞之御湯殿下庭上遥拜彼社方給弥催御  
 欽仰之誠云云件時尅京録倉共以雷鳴地震云云まこと鹿島大  
 明神御上洛之由風聞出来之後賊徒追討神戮不空者欽  
 云云建久二年の条も奇異のこと也悉く明和八年座主ト部  
 常敬瑞験記との二巻を著して古今の貴賤拜禱奉り  
 て瑞験を蒙りてを詳記集たるとれよりけり

○春日御遷幸 日記に奈良宮の御時朝廷の近き守護り  
 ありてまことと称徳天皇神護景雲二年六月廿一日白鹿は  
 衆の神枝を鞭とて大和國添上郡御笠の御遷幸ま



一、其時中臣鹿嶋連宗則時風秀行三人（宮司の鶴と乗  
鹿嶋等）て供奉（今、宮司家の紋、鶴と  
馬とこれに依る）同年十一月八日神託（依朝延より）に依りて  
 勅使と立られ、山の麓に南向に宮を造り、鎮まり坐させ  
 まり、宗則も立歸奮の如く神宮を守り、  
 此時焼栗と賜り、託宣に其子孫の榮んると、栗の生  
 立、繁茂らんと、かぐべーとの、歸とのち御言のまゝ小  
 植、生、出、り、や、栗、よ、さ、り、え、り、ま、（是より姓と中  
臣植栗連ともいふ）時風秀行  
 の春日よと、ゆ、く、祠官とありぬ、今の辰市大東の家なりと  
 の、御遷幸のこと、諸書より、（一代要記、帝王編、年記、公重、根源、神道集、詞  
林、采葉抄、鹿嶋同、答、色、葉、字、類、抄、并、二、社、本  
録、并、二、社、法、式、諸、社、根、元、記、源、平、盛、衰、記、神、社、啓、蒙、  
神社考、大日本史、例傳記、この外、そのまゝ、あ、る、と、い、う、）あ、く、よ、り、ひ、傳、へ、と、さ、ら、  
 國史に記されぬ、た、ま、し、く、し、れ、う、り、や、あ、ん、一、系、を、と、り、  
 か、し、れ、よ、け、り、て、春、り、を、い、ひ、笠、の、山、り、浮、き、の、ま、と、い、う、哥、兼

載雜談に、神詠とあり、ひがごとく、後人の讀むところ、追もるし  
 奉幣使、延喜式に、鹿島社五色薄純各一丈、安藝木綿二  
 十枚、盛農料商布一段、布綱三條、明櫃二合、調布二丈、荷覆  
 二條（この時、宮司祓宜、祝物、使、藤原氏六位已下一人、寮史生一  
人、貴幣夫二人、云、其使等當日貴幣發、寮向國、と、い、え、て、毎、年、  
參向ありし、又、新帝即位、立后、任大臣、か、の、ち、り、も、う、り、と、い、  
當宮へ奉幣使と立らる、と、い、う、）大鏡に、（幣帛と、い、ふ、萬  
物、を、千、座、の、置、座、に、充、つ、神、に、備、せ、り、と、い、ふ、）續本朝文粹に、  
 立后之後、八社奉幣、並鹿嶋奉幣、云、類聚符宣抄、大政官符  
 一、為鹿島香取兩社奉幣、帛、差、件、等、人、宛、使、發、遣、如、件、兩、國、承  
 知、依、例、行、之、符、到、奉、行、天曆五年正月廿二日、（台記の康  
治元年八月廿日、東鑑の壽永元年八月十一日、向書覽喜三）



年五月九日など奉幣使とすぬせしことあり  
和歌

万葉集

那賀郡上丁 大舍人部千文

雲津鹿多神と祈りて皇軍より系とよみしと

拾遺愚草

定家卿

かしのや梅を採るときの君が夢を神のまふし

夫木集

後京極摂政

鹿島のや歌の羽はよみし昔に絶えたり

月清集

同

まればの心の麻をよみしとて花の夕暮

歌枕名寄

後徳大寺左大臣

うみのと鹿島のかの地をよみしとて水はあけり

同

光明峯寺入道

糸たのひ麻島のよみの垣乃文くさうぬ昔の物

同

頭雅

鹿島の鹿をよみし宮柱をよみしとて

拾玉集

慈鎮和尚

光りあふとぬかりの杉へ哉麻島れふり通ふん

同

同

解のやたぬと鹿島山と喜目やまも梅麻乃

和歌

安岡成政

鹿島なる神のちりふみはをよみしとて

鹿嶋紀行

藤原吉深

治りて世に母國とありぬも鹿島に神のあけり



香取日記

平春海

中津川系高崎のいふ杉のいふ先一と神の内代このと

回

橘千蔭

鹿島ゆき神まむたぐら松の枝の日落のうらけり幾代を

名所今歌集

同

大王の三笠山もあつたつて麻一まが崎乃幸つ社

外國は鹿嶋とよめる歌を百葉よむの浦坂をらそぬ麻島なる

約まは海土とみくゆりこん又青島より熊本とこくま

舟れがらとまきく都一舟もゆ也能登曾丹集玉葉集

命婦集いづるまきせしらおまき舟をたの海乃いづる恨

菅家百葉集拾遺集鹿島あつ筑波の神のほくくと

坂處の義はや坂の嶮いふより戸い處の略語ありと沼尾坂

戸の二社と神宮まつまきく尊敬まゆりまきく今と神宮をあせ

い鹿嶋三社とまきく

沼尾神社沼尾村にある祭神経津主大神風土記其社

北沼尾池古先曰神世自天流来水沼所生蓮根味気太異

甘絶他所有病者食此沼蓮早差験云

夫木集

藤原光俊

沼尾の池に玉の神代よりたぬや深き誓うとん同書此

哥と康元元年十一月五日鹿島社にまきく次は宮めぐり

沼尾社への池のこまきくいふとくまきく神代は空より水

くまきくと思ふことありまきく蓮の生く服まきくゆれ不老不

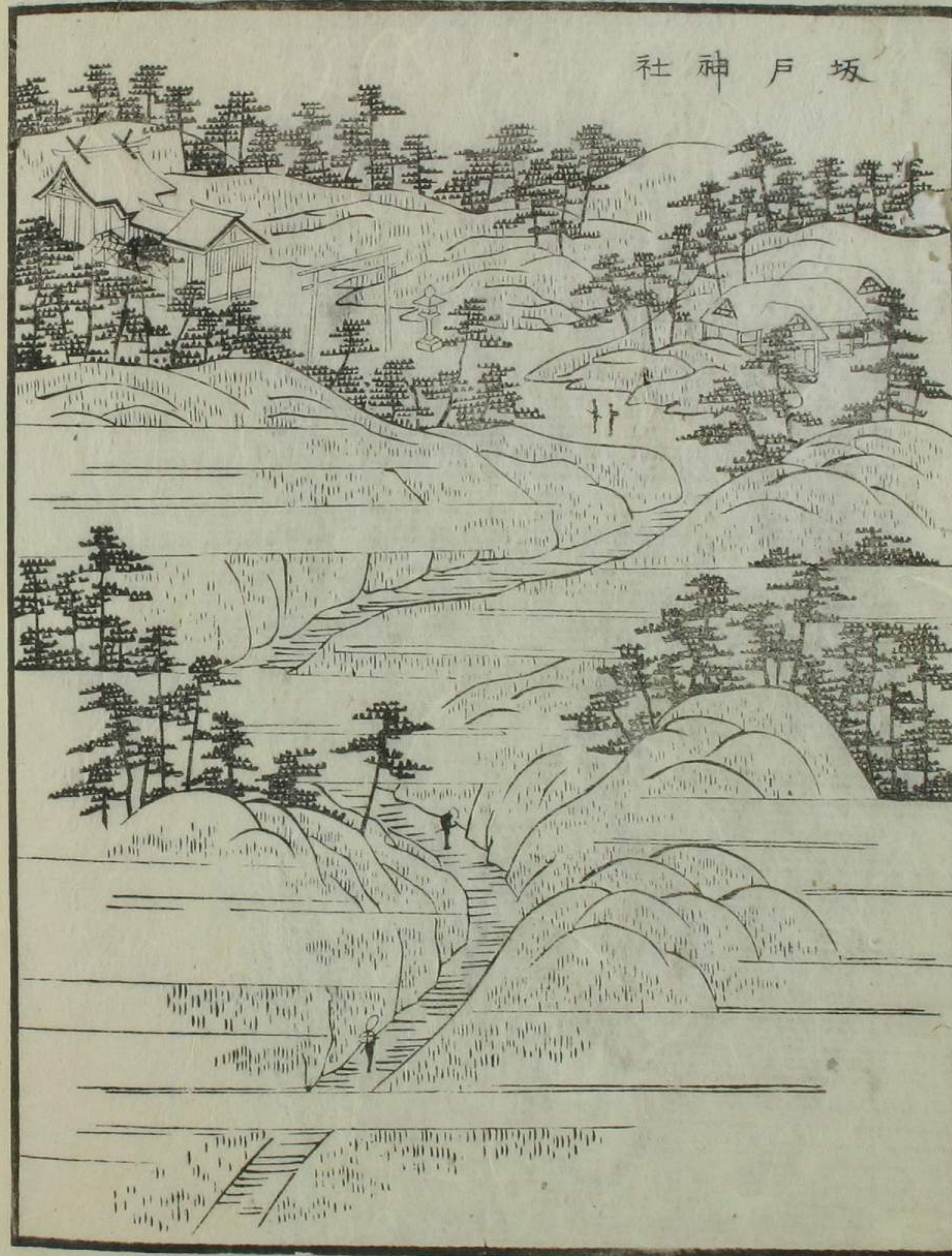
死まきく風土記まきくえたまきく今いふまきくまきく云云







坂戸神社



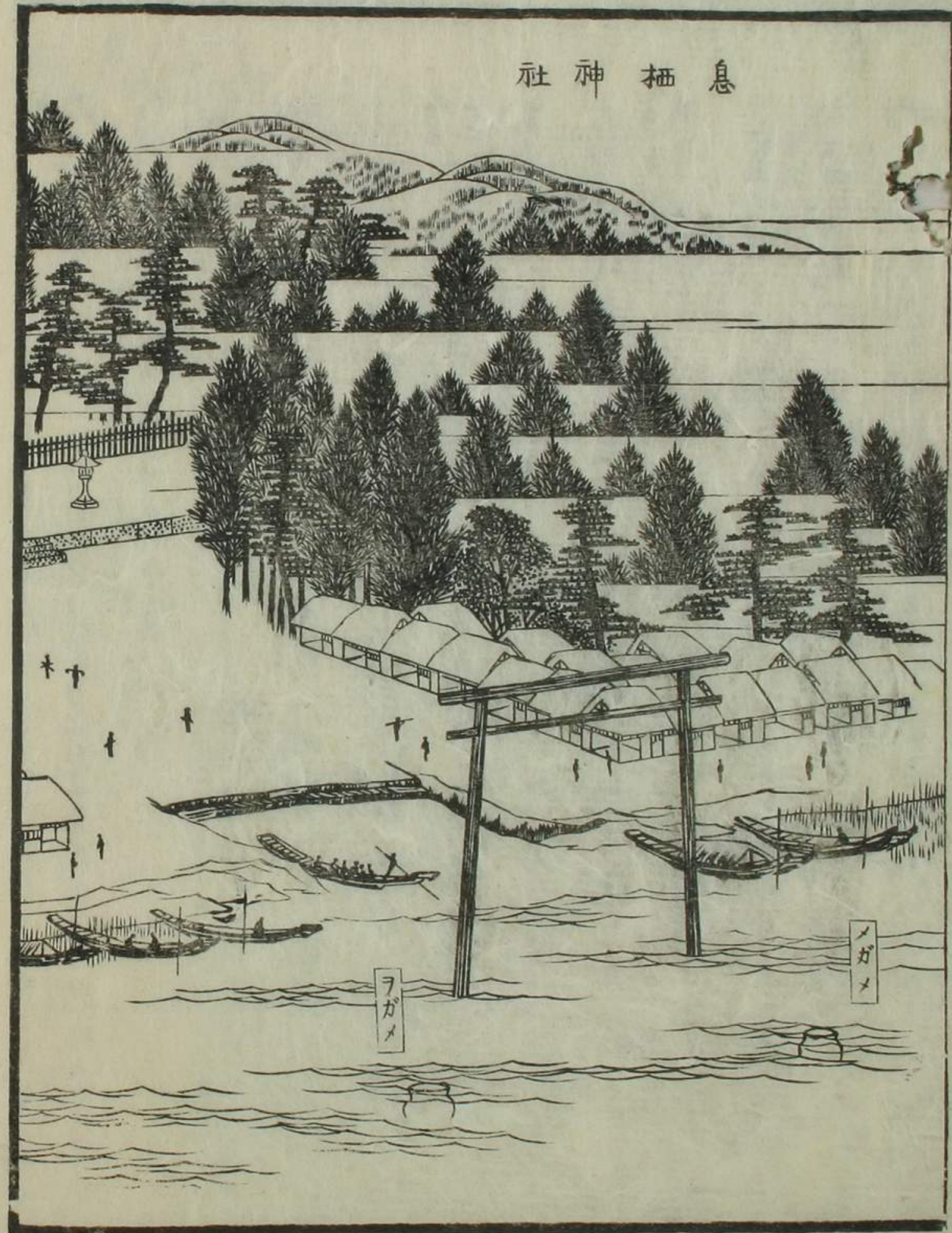
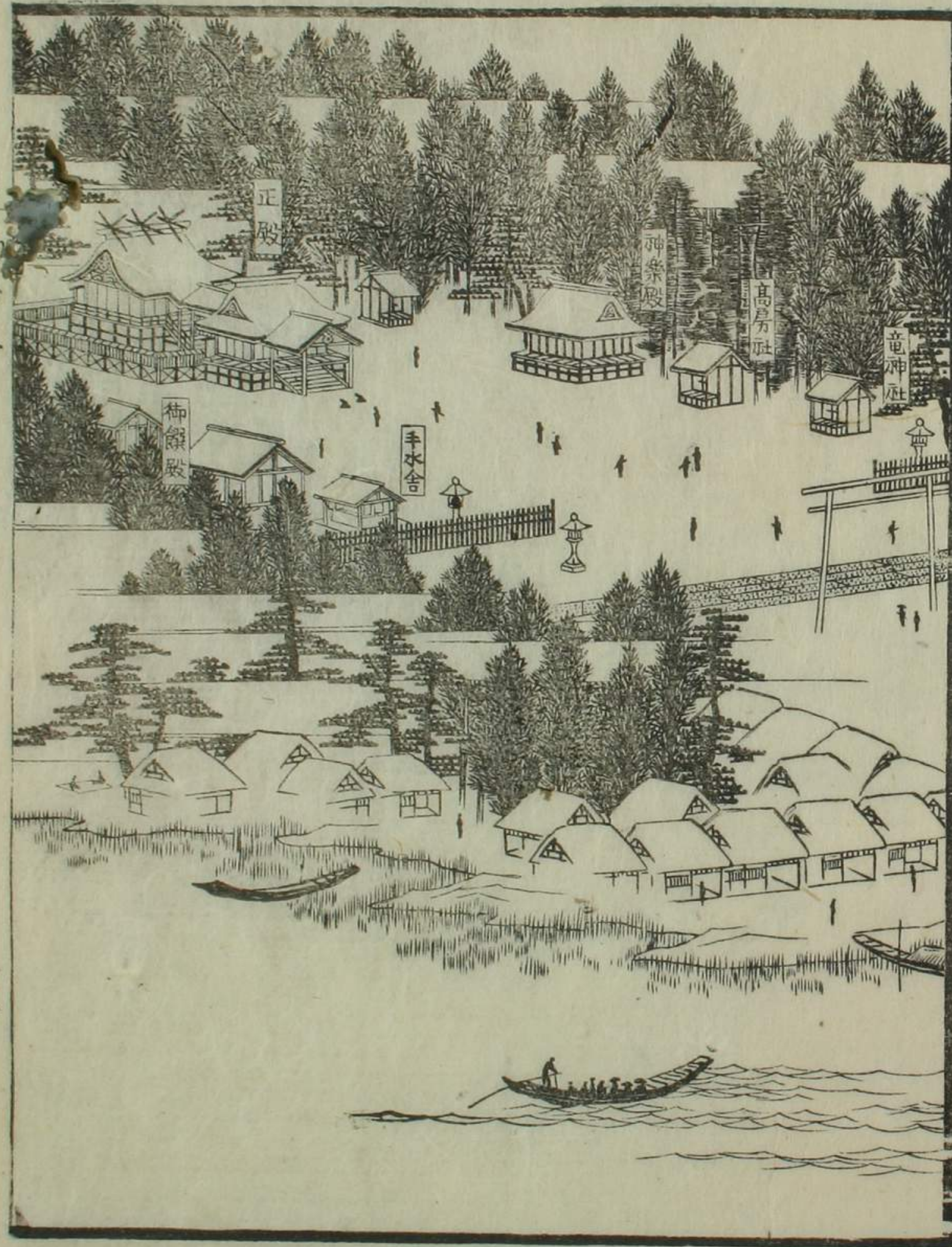
鹿嶋志

六

跡のゆくまじしゆくはいと敷くは久もさうんぢも沿の有ととろの岡を沼丘の義ありし。

○息洲神社 息洲村の海邊にあり。住吉三神底筒男中筒男表筒男命を祭る。こゝも鹿島の摂社として毎年の祭礼等ある。鹿島よりつとむ四月十三日の祭に。舞座、神舞、海原、人形、紙、作、後、なほ、古事あり。鹿嶋香取息洲と三處に鼎の三足れ如く。いづれも三里づらち隔たりたり。いづれに参詣るゆれ少のらむ。諸國里人談ふ。常陸國息栖明神の磯ちりれ海中より。瓶男瓶とく二の奇石あり。男瓶の経一丈あり。よして銚子のかゝら。其口とおぼしき所は溝あり。中を控のごとく窪み鍋ろ形あり。女瓶のつとむ五六尺なり。土罫に似たり。土俗曰これに神代の子土罫と。此石満潮り。二三尺沈めり。下泻よ水の上





鹿嶋志上

二十



あつた。銚子の中を素水より潮の味ひる。是を忌塩井  
 の水と云ふ。人皇十五代若櫻宮天皇御宇三癸未載二月鎮  
 座の額あり云々。此瓶の水中より鳥居の左右あり。常  
 常は水底に沈たり。予嘗て水より出ると空の曇る時を見  
 たり。天より雨より出ると息洲と云ふ。名を沖洲の義あり。浮洲  
 の義ありや。

○高房神社 正殿の前よりあり。祭神建兼槌命神代記より。故加  
 遣倭文神建兼槌命者則服云々。と見え。武甕槌大神の命  
 たり。星神香々背男と征伐し神たり。伊織をたじ  
 める。神たり。倭文神と云ふ。倭織の伊勢氏の考より。高房の  
 御名のより。立綱ほり。説より。高房の神の美称あり。房は古語  
 拾遺より。好麻之所生故謂之総國とあれを生麻の義あり。凡



